

随所に新鮮な出会いを
与えてくれる新訳

〔評者〕小原克博



教義学要綱
Dietrich von Ghent
Carl Barth
カール・バルト著
天野有・宮田光雄訳

教義学要綱 ハンデイ版
カール・バルト著
天野有・宮田光雄訳



名著は繰り返し訳し直され、その時代にふさわしい新しい命を吹き込まれてきた。本書も、その一冊に数えられるべきものである。新訳刊行のいきさつを最初に記しておこう。バルトの訳書を多く手がけてこられた天野有氏が急逝された後、遺稿の中から完成に近い形で本書草稿が発見され、それに対し、宮田光雄氏が全面的な訳文見直しを行った末にできあがったのが本書である。二人の卓越した訳者のおかげで、バルトの肉声に近い《語り》が見事に再現されている。カール・バルトを「二十世紀最大のプロテスタント神学者」と呼ぶことに対しては、おそらくバルトに批判的な立場の人であつても同意せざるを得ないほどに、バルトは広範囲な影響を及ぼしてきた。とはいえ、時代は二十一世紀。私の学生時代には、神学を学ぶことはバルトを読むことである、という雰囲気はまだ残っていたが、今、若い人に限

らず、教会の信徒にとつても、難解な印象のあるバルトは近づきたい存在のようだ。それだけに、今回の新訳は時宜に合ったものといえる。

本書の意義は大きく二つある。一つは、バルト神学の最適な入門書だということである。バルトの神学的思索のエッセンスが本書には詰め込まれている。本書は最初に一九五一年の井上良雄訳として刊行され、一九九三年に「新教セミナーブック」の第一冊目となり重版され、読み継がれてきた。井上訳は「である」調で硬質な論文のような体裁を取っているのに対し、新訳の本書は「ですます」調でオリジナルの講義の雰囲気を与えている。

本書は、戦後間もない一九四六年、バルトがボン大学の夏学期に行った講義が元になっている。本書「はしがき」でバルトは「私は、生まれて初めて、厳密に書き起こした章）。《出会い》なしには信仰は情性化するしかないだろう。本書は各章で私たちの思い込みを打ち砕き、新たな視界を開いてくれる。宮田氏が「訳書あとがき」において、最後の審判（二〇章）の講義を初めて読んだとき「目からうろこが落ちる」ような衝撃を受けたと記しているが、同じような感覚を私自身も持った。生ける者と死ねる者とを裁くイエスは、かつてご自身を神の裁きに捧げた方なのであり、それゆえイエスの再臨は《喜びの使信》なのである。このような新鮮な《出会い》が本書の随所で与えられる。バルトは教義学の主体は教会であり、それは聖書釈義と実践神学の間に置かれていと語る。本書が教会の中で読まれ語られ、実践への力となること願う。

（こはら・かつひろ）同志社大学神学部教授
（小B六判・三六六頁・本体二〇〇円＋税・新教出版社）

ヨベルの新刊案内

大頭真一 焚き火を囲んで聴く神の物語・説教篇⑧
栄光への脱出 出エジプト記 新書判・一九二頁 二〇〇円

待望の最新刊！
神はねたみ深く、民のうなじはコワイ。
この旅、とても他人事とは思えない！
神の民の旅路は、世界的危機の時代に生きる私たちにとって無視できない鮮烈な表象に満ちている。脱出する、荒野をさまよう、約束の地をめざす、現代人の生き方に向う語るか、第3弾！

ヨーロッパ思想史
金子晴勇 キリスト教思想史の諸時代Ⅲ
アウグスティヌスの思想世界

反響の第二回配本

キリスト教思想史の諸時代Ⅲ
「ヨハネの福音書」の神学

Ⅰ ヨーロッパ精神の源流
Ⅱ アウグスティヌスの思想世界
Ⅲ ヨーロッパ中世の思想家たち
Ⅳ エラスムスと教養世界
Ⅴ ルターの思索
Ⅵ 宗教改革と近代思想
Ⅶ 現代思想との対決

予約受付中！
新書判・平均256頁・各巻本体1,200円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 星 (90頁)